

2025年1月26日 礼拝説教要旨

ヨハネによる福音書講解説教24「あなたは良くなった」

詩編104：29～30、ヨハネ5：9b～18

ベトザタの池で、38年もの間、病気で苦しんでいた人をイエスさまがお癒しになりました。ところが、この出来事をきっかけにある問題が起こります。「その日は安息日であった」(9節)とあります。安息日というと、十戒の第四戒を思い起こします。「安息日を心に留め、これを聖別せよ。六日の間働いて、何であれあなたの仕事をし、七日目は、あなたの神、主の安息日であるから、いかなる仕事もしてはならない」(出エジプト20：8～10)ユダヤ人はこの戒めに従って安息日の労働を禁じていました。そこにまた細かい規定が作られまして、実に613もの禁止事項があったと言われていました。歩く歩数や食事を作ること、火を起こすことも制限されました。当然、イエスさまに癒していただいた人が床を担いで歩いたことは、労働と見なされ、律法違反になりました。それでこの人はユダヤ人たちから咎められてしまいます。

ここに見えてくる一つの問題は、その人が癒されたことを素直に喜ぶことができないユダヤ人たちの心の狭さです。38年間も病気で寝たきりの人が起き上がって床を担いで歩き出したのです。それは大いに喜ぶべきことですし、何よりその人を病の中から立ち上がらせてくださった神さまの御業を讃えるべきです。しかし彼らが見ているものはそこではない。律法で許されるか否か。しかもそれは律法そのものではなく自分たちが勝手に作った細則です。つまり自分たちの意に合うかどうか、自分が判断の基準になっている。わたしたちもそのように物事を見ていることがあります。結局、わたしたちは自分の思い通りにしたいのではないのでしょうか。神さまの言葉よりも、自分の意に合うかどうかなのです。

この癒された人にも問題があります。律法違反を咎められて怖くなったのでしょうか。まるで責任をなすりつけるように、イエスさまが「床を担いで歩きなさい」と言われたからそうしたのだと答える。あのアダムとエバが木の実を食べたときにアダムが神さまに「あなたが共にいるようにしてくださった女が与えたので食べた」(創世記3：12)と神さまに責任転嫁したことを思い起こします。そして自分をいやしてくださった方がイエスさまだと分かると、すぐにそれをユダヤ人たちに知らせるのです。自分は38年もの病の苦しみからイエスさまによって救われたにもかかわらず、その保身ゆえに、結果としてイエスさまを裏切るような行為をしてしまう。これも保身ゆえにイエスさまを知らないと否定したペトロの弱さを見るようです。そのようにしてイエスさまの愛の手を払いのけてしまう。38年の苦しみから救われたことをすっかり忘れてしまう。「喉元過ぎれば」と言いますが、わたしたちはそのように神さまに不義理なことをしてしまうのです。

今日のところは、終始、安息日のことが問題になっています。「わたしの父は今もお働いておられる。だから、わたしも働くのだ」(17節)「わたしの父」とは、創造主である神さまのことです。創造主である神さまが働いておられるのだからわたしも働く。このイエスさまの言葉も、安息日に働くことを禁じるところから来ています。そもそも安息日とは何の日なのでしょう。それは創造の御業の完成を祝う日であります。それこそ何もない混沌とした闇の状態に、神さまは「光あれ」と光をお与えになりました。その光から始まって神さまは天地万物を造られます。何よりこの世界は、神さまの光を映し出す存在として造られています。安息日は、この神さまの創造の御業を心に留める日に他なりません。そのために人間はその業を停止する

のです。人間が働いてしまうとその光が見えなくなってしまうからです。ユダヤ人たちは、律法を重視するあまり、かえって光が見えなくなっていました。規律ばかり増えて、肝心な安息日の心を見失ってしまったのです。

イエスさまが安息日に病人を癒されたのは、人間をもう一度神さまの光によって創造するために他なりません。罪に支配され、神さまの光を映し出せなくなってしまう人間を本来のかたちに回復させるためです。そのためにイエスさまはベトザタを訪れ、38年もの間、病に捕らわれて、本来の人間性を失っていたこの人を癒されました。イエスさまによって「光あれ」とおっしゃった神さまの創造の御業がここに行われました。神さまは、イエスさまを通して、なおわたしたちのために、創造の完成に向かって働いてくださるのです。

それゆえ、イエスさまはこの癒された人に向かって言われました。「あなたは良くなったのだ。もう、罪を犯してはいけない。さもないと、もっと悪いことが起こるかもしれない」(14節) この「あなたは良くなった」は、神さまが天地万物を完成された時におっしゃった「見よ、それは極めて良かった」(創世記1:31)を思い起こさせます。新共同訳聖書は訳していませんが、ここには「見よ」(イデ)という言葉があります。それは創世記の「見よ、それは極めて良かった」と同じです。改めて創世記とのつながりを感じます。このベトザタの池で神さまは創造の御業を行われました。イエスさまという光によって、再び人を新たに造り変えられたのです。だからもう罪を犯してはいけない。せつかく回復されたのだから、再び罪に逆戻りしてはいけないと、イエスさまはおっしゃいます。けれども逆戻りしてしまう。イエスさまの救いを理解できない。これを払いのけてしまう。そこに人間の弱さがあり、だからこそイエスさまはこの後十字架に向かわれるのです。

「さもないと、もっと悪いことが起こるかもしれない」(14節)これは脅しでも何でもなくて、罪の中に逆戻りすることが神さまの裁きを決定的にするということです。けれども、この「もっと悪いこと」をイエスさまは自ら十字架で担ってくださいました。わたしたちが受けるべき神さまの裁きを引き受けてくださったのです。そしてよみがえりによって、わたしたちを神さまの光の中に立たせてくださいます。そのためにイエスさまは、今も、そしてこれからも働いてくださいます。

天の父よ。この混沌とした闇の世界に、あなたはイエスさまをくださいました。そして十字架とよみがえりの御業によって、今も、これからも創造の御手の業を止めない神さまの恵みに感謝するものです。どうぞ罪に逆戻りするのではなく、この恵みに応えて生きるものとさせてください。今週も神さまの光にふさわしく歩むことができますように。主の御名によって祈ります。アーメン。